

アル＝アミンからの詩

縄田 浩志

スーダンへの日本政府無償援助停止のニュースが、ハルトゥームのテレビで報道された夜、僕は、そのことは知らずに、ハルトゥームの西の外れの一角にある彼の家にいた。彼の名は、アル＝アミン・アル＝バダウィーという。

彼は巨体である。白いジャラベージャに包まれた体は、180cmの100kgというところだろうか。その彼の体から、透明な響きと押し寄せてくるようなリズムを持ったアラビア語の詩と歌が、砂漠の中の泉のように沸き出てくる。ラクダを歌う歌あれば、女性を歌う歌あり、僕を歌いこんだ歌あり。その彼が、1カ月前、僕にアラビア語と英語で書いた詩を見せてくれた。題名は、「我々に答えてくれ、日本人よ」という。

「ある日／そこに起こった／すごいパラドックスが／シンプル・マンが東京に移動させられた時に／罪を犯したからでなく／豚に／彼は考えてきた／スピリチュアルな方法で／知の源泉を求めて／真実と手をつなぐために／シンプル・マンは／何も持たない／詩以外には」という語りかけではじまるその詩は、40ページにも及ぶ大作である。

その詩の一節に、「答えてくれ／日本人よ／なぜならあなた達はいま／世界の隠れた指導者達よ」とあるように、今、彼とその仲間から、様々な問かけを一晩中受けている。

彼らが住む場所は、僕らが話しているときにも、流れ星が何度か夜空を横切るのが見えるようなハルトゥームの町の電気のまったく見えない場所にある。彼らの家の周囲には、同じような家々

が無数に立ち並ぶ。彼らは、だれもが若く、男女合わせて10人程だろうか。道路と家の敷地を区切るレンガの塀も半ば崩れかかっているが、そんなことがだれもおかまいなしに、彼らは、語り、食べ、折り、そして眠る。彼らの和んだ屈託のないその笑顔は、今夜彼らと共に語らった僕の心に染み込み刻み込まれていく。その何とも言えない暖かさの中で、僕は彼らと共に静寂の中で眠りについた。

明るる朝、彼らの家を出て、アル＝アミンと僕は手をつないで歩き始めた。無数の不規則に立ち並んだレンガの壁の家や、木と皮でできた小屋や、むしろでできたテントの中を縦横無尽に走る道を歩いた。ここは、「違法住居地区」もしくは「難民キャンプ」といわれる場所である。彼も、言うなれば、「難民」の一人である。しかし、僕には、今、その言葉は、彼らにはあまり相応しくないように思えた。しばらく歩くと、ロバの荷台ぐるまの停留所に着いた。

我々を乗せて走り出したロバの荷台ぐるまは、ゴチャゴチャした所から、突然開けた空間に出た。その空間のど真ん中に、塔が立ち現われた。グッパ（聖者廟）である。それを取り囲むように、何千という墓が整然と並んでいる。僕は彼に「これは古くからあるのか。」ときくと、「我々が、84年以降ここに移り住んできてからできたものだ」と言った。そして、彼はこうも付け加えた、「我々の仲間が眠っている」と。

売りに出されるラクダやヒツジやウシと、ズツ

ラ（ソルガム）を運ぶトラックと、靴や刀や服を作る職人の小屋と、あらゆる商品を集めた店と、これらの間を走り回る人々がごった返しているスークに入ると、僕は、アッラディーアおばさんのところに立ち寄った。スークの外れの家の壁の脇に張り出しの屋根をつけた小さなお茶屋である。木とラクダの皮でできたベッドには、7、8人が座れるだろうか。アッラディーアは、そのスークの活気そのものを吸い取った力強さが滲み出る顔をほころばせながら、「心配したよ。昨日は、あれからどうしたんだい。警察にいったのかい」と僕らに聞いた。アル＝アミーンは彼女に語り始めた。

僕らは昨日、彼らの家を訪れる前、マハーシンおばさんの所で最高においしい炭火焼きの羊を食べ、冷たいハスキーな声と透き通った目が、時々見せる笑顔に調和するバツヒータねえさんの所でジンジャー・ティーを飲み、そして最後にアッラディーアおばさんの所でハルジャル（香辛料の一種）入りのミルクを飲んだ。そして、ロバの荷台ぐるまに乗って、彼らの家に行こうとすると、一人の男に呼び止められた。その男は、そこにいる人々と同じ服装のジャラベヤをきた警官だった。

アル＝アミーンとその警官はしばらく押し問答をした。僕は何も口を挟まなかった。警官は、僕らが警察署にいかなければならないという。僕らは従った。僕らが警察署に行き、IDを見せて、その警官の上司に会ってしばらくすると、何も問題がないから行っていいと言われた。僕が、スーダン人と共にスークで食べたり飲んだりすることは、問題ではないらしかった。ただ、その警官は、アル＝アミーンに言った、「こんな場所は、ハッワージャ（外国人）に見せることはない」と。アル＝アミーンは言った、「いや、これは、スーダン人の生活である」と。

僕らは、警察を出て乗ったタクシーのなかで、彼に聞いた。「もし、仮に僕がムスリムで、アラビア語で自分はムスリムであるとあの警官に言っていたらどうだったろう」と。「いや、それと

も、僕がこう言ったらどうだったろう」と言っ
て、僕はアラビア語で、こう暗唱した。

「言っ
てやるがいい。おお不信者たちよ。／わたしは、あなたがたが崇めるものを崇めない。／あなたがたは、わたしが崇めるものを崇める者たちではない。／わたしは、あなたがたが崇めてきたものの、崇拝者ではない。／あなたがたには、あなたがたの宗教があり、／わたしには、わたしの宗教がある」と。コーランの不信者たちの章である。彼は驚いた。タクシーの運転手も驚いた。そして彼らは、おおいに笑った。僕も笑った。

アル＝アミーンが、アッラディーアに、こう昨日の様子を説明し終わると、彼女は「それは良かった」と心の底から喜んでくれた。その彼女は昨日、僕に最初にあった時、「おまえはムスリムか」と僕にきいた。僕は違うと言うと、「おまえはアラブなのに、ムスリムでないなんて信じられない」と言った。アル＝アミーンは彼女に、「彼はムスリムではないが、目が澄んでいるだろう（スーフィーが好んで用いる表現）」と言った。彼女は僕目を食いいるように見つめ、そしてラクダの潤む目のようなヘッドランプを持ったトヨタ・ピックアップと、ラクダの雄叫びのようなクラクションをならすニッサン・ローリーの国からやってきたアラブ・アル＝ヤバーン（日本のアラブ）である僕は、はじめて彼女の世界に存在する人となった。

今日もまた、僕らは、彼女の特製ミルクを注文した。アル＝アミーンは、新聞を買って、読みはじめた。しばらくして、ある記事を僕に示した。新聞の片隅の広告に「ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所、今秋夜間言語クラス生徒募集」とあり、その下には、「日本語とディンカ語」と書かれてあった。

ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所は、僕が現在所属している所でもあり、そこでは、去年から、青年海外協力隊の人が日本語を教えていた。日本語とディンカ語（スーダン南部最大部族の言語）の組み合わせは、現在のスーダンの状況を考えると、僕には、とても奇異に、そして皮肉

に映った。

ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所では、今学期から数年の間活動が休止していた毎週月曜日の特別講義と毎週木曜日のフォークロアの特別講義を、生徒たちが中心となって再開した。僕も、その再開第一回目の特別講義を依頼され、「日本文化入門：ある日本人の一日」と題しておこなった。ある典型的な日本人の一日の生活を小説風にアラビア語で語った後、それについて、スーダンの人と文化との類似点・相違点に留意しながら、英語で解説した。日本の経済・政治・社会・文化・言語などについて、教授・生徒たちからの質の高い質問を受けた。その聴衆の一人に、彼、アル＝アミン・アル＝バダウィーもいた。

その僕の講義の明くる日、彼は、日本人への詩を作ったが、興味があるかと、いってきて、互いに知るところとなった。冒頭で引用したように、スーダン人の「シンプル・マン」から日本人への問いかけの詩である。「シンプル・マン」とは、修行ざんまいの生活を送るスーフィーや砂漠の遊牧民という「シンプル・マン」であるという。彼もまた、その「シンプル・マン」の一人である。

そして、その詩の中の「シンプル・マン」は、ある時は遊牧民のように地理的文化的境界を疾風のこたく駆け抜け、ある時はスーフィーのように精神的境界を縦横無尽に渡り歩く。この詩は、物質的に精神的に互いに遠い世界に生きる日本人と「シンプル・マン」が、互いに他の世界を突き抜けることが可能になった現代において始まる真の対話の幕開けを僕に告げた。

彼の家で、たくさんの「シンプル・マン」から、日本に関するそして僕に関する質問を受けたように、スーダンに来ておよそ半年の間、数え切れぬ人達から、たくさんの質問を受けた。僕が、彼らに質問をしたよりもその数はずっと多い。

今、僕は、彼の詩に、そして、無数の質問に、答えなければならぬ。僕という存在を、彼らの前に描き出さなければならぬ。たとえ日本人というものも、日本というものも、僕には何か分からなくても、そして、僕が、日本・日本人という

ものを代表して、もしくはその一人として、彼らに述べるのが無意味だとしても、彼らにとって日本人という名の僕が、彼らの前に示されなければならない。彼らの文化や社会や歴史に関する記述・解釈・研究よりも先に、僕が最初にやることは、そして、最後までやることは、彼らにとって日本人という名の自分が、僕の人生を、アル＝アミンがやったようにアラビア語の詩で吟じ、アッタイーブ・サーリハ（スーダン人作家）がやったようにアラビア語で物語ることなのかもしれない。

僕が、その彼らの言語で、どれだけ自分という存在を、彼らに対して最も適切に描き語れるのかということが、彼らを理解するという終わりのなき道を突き進んでいっていることの証であろうと思っても、そんなことが僕にできるだろうか。また、逆に、彼らのことを、彼らの言語で、そして僕の言語で、描き語ることもできるのだろうか。

そして、その僕の声が、彼の声と一体化して、または共存して、日本人やスーダン人などという互いの境界を突き抜けたとき、その交錯した声の一つの作品を作りあげることができるだろうか。

日本の経済援助が停止され、ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所の日本語の授業を教えている日本人がいなくなろうとしている今、アル＝アミンの詩は、ハルトゥームの郊外の西の外れのスークの一角にあるアッラディーアおばさんのお茶屋の片隅でミルクをのむ僕に、問い続ける。

「あなたは我々を悩ませる／忘れられた世界の遠い片隅で／人々の叫びが立ち上がる／日本よ日本よ日本よ日本よ／だけどあなたは答えない／どうか言ってくれ／何があなたの舌を沈黙させているのか／何があなたを秘密にしたままでいようとさせているのか／どうしてその秘密をあばこうとしないのか／大きな破局が訪れる／日本人がこの質問に答えなければ……」

そして、僕が、この質問に答えなければ……。（1992年8月）

（なわた ひろし

ハルトゥーム大学アフリカ・アジア研究所）